

2013 3/26

No.1943

毎月第2・第4火曜日発行

# 政経 かながわ

一般社団法人  
—神奈川政経懇話会—



健脚自慢の小学生が集う「第22回よこはま国際ちびっこ駅伝大会」が9日、横浜市港北区の日産スタジアムで行われた。駅伝とロードレース合わせて5702人が出場し、柔らかな春の日差しを浴びながらゴールを目指した。



# 政経かながわ

2013 3/26 No.1943

## contents

視点・点描	3
キングに学ぶ「温故地震」	
講演録	4
「つながりによる経済成長 ～産業集積とグローバル化」 東京大学大学院新領域創成科学研究科 国際協力学専攻教授 戸堂 康之	
国際	8
中国、尖閣で一段と攻勢か 対米、対日外交に重点	
経済	10
製品シェアの高さあだに 電子部品実装大手が破綻	
くらし2013	12
精神障害の偏見解消を	
広告珍談	14
～うまい物がたり①① 噛みつづける	
政治反射鏡	15
96条改正は必要か 「国防軍」目指す安倍自民	

### 事務局だより

#### ◇横浜定例講演会

2013年4月24日(水)

13時30分～15時

新横浜プリンスホテル

講師は共同通信社経済部長

永井 利治氏

演題は「参院選を見据えた安倍政権の経済・財政運営」(仮題)

# 視点 点描



## キングに学ぶ「温故地震」

5年後の1928年。庁舎の維持管理に当たる庁舎管理課によると、内部にはりや柱が縦横に張り巡らされた堅牢な構造が、築後84年が経過してなお「現役」でいられる秘密なのだという。

キングの建物としての「健康状態」は、科学的な物差しでも確かめられている。県が行った耐震診断の結果は「合格」で、1955

年完成の分庁舎、1966年完成の新庁舎がともに「震度6クラスの地震後に継続使用するには大規模な補強を要する」と診断されたのとは対照的だ。コンクリートの劣化でも、キングの方が進み具合が遅かった。県はこうした結果を受け、約60億円をかけて分庁舎を建て替え、新庁舎については約130億円を投じて免震補強する方針を決めている。

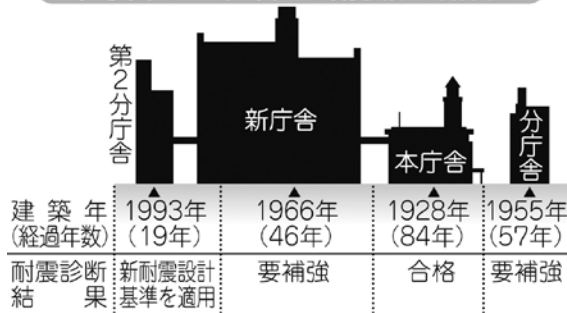
五重塔を思わせる塔屋と重厚なたたずまいが特徴の県庁本庁舎（横浜中区日本大通）。「キング」の愛称でも知られる地下1階、地上5階の建造物が、発生から今年で90年の節目を迎える関東大震災と浅からぬ縁があることは、意外と知られていないようだ。

近ごろは、同様に独特の「塔」を持つ横浜税関（愛称・クイーン）、横浜市開港記念会館（同・ジャック

ク）とともに「横浜三塔」として紹介されて人気を博し、ドラマなどのロケに使われることも多いからであろう。だが、もともとは、関東大震災で内部が焼失して機能停止に陥った3代目の庁舎に代わって建てられた、危機管理型の役所としての性格が色濃い建物なのである。

鉄骨鉄筋コンクリート造の「4代目」が完成したのは、震災から

県庁舎の建築年数と耐震診断結果



それにしても、震災後間もなく再建された本庁舎が丈夫で、建築技術も格段に進んだはずの高度経済成長期に建てられた2棟が地震に弱いとは…。震災体験とそこから得たはずの教訓を次世代に引き継ぐことがいかに難しいか。もの言わぬキングが伝える「温故地震」。そこから学ぶべき点は多い。

(神奈川新聞社

統合編集局次長 宮本 敏也)

# 噛みつづける

太平洋戦争の敗戦。ボクは国民学校（41年、小学校が改称。47年、小学校にもどった）の4年生。濃い緑色のジープに乗った、アメリカの兵隊を初めて見た。こわかったけど、チョコレートやチューインガムをくれた。持って帰って母親に、こっぴどく叱られた。鬼畜米兵からもらうとはなににごとぞ、ということだろう。

チューインガム、口のなかで噛みつづけて味わう菓子。中南米産のサボジラの樹液からとるチクル、あるいは合成樹脂をベースに甘味料・香料をまぜて製すると広辞苑にある。

サボジラという、アカテツ科の常緑高木（小笠原・沖縄にも自生）。「チューインガムの木」ともいうそうだ。気の毒に、樹液をしぼり

取られ、名前まで変えられてしまった木。そのゴム質の乳液を煮詰めたものをチクル、チューインガムの原料と

か。チューインガムの始祖は4世紀ころ、中央アメリカのマヤ族がチクルを噛みつづける習慣があったという。

19世紀、メキシコのサンタ・アナ大統領が砂糖や香料を加えて改良した。

アメリカで商品化され、日本に輸入された。そのころ、この広告

が掲載された。

「楽しいうれしいクリスマスとお正月 大喜びで飛んだり跳ねたり」

「米国リグレイ会社製チウインガム」「滋養世界的菓子」「一名



噛む菓子」

「一包 金十銭 御進物用二十包 一円七十五銭」とある。

左の女の子が抱えている「スペヤミント」とは、シソ科の多年草。葉っぱはシワシワ。欧米では香料植物の王さま。ペパーミントだ、スペヤミン

ごろ、使われなくなったが、身体の栄養になるもの。大正時代には、たびたび広告に登場した。

1包に板状チューインガムが何枚入りか知らないが1包10銭、キヤラメル1箱とおなじ値段。

クリスマスツリーを飾って、サントさんを待ちながら眠る。そうすると、いままで見たこともないお菓子を待つてきてくれた。子供たちはどんなに喜んだことだろう。風船ガムがあった。かんでいる

ガムを、舌で器用に口先に持つていつて、息を吹き込むとぷーっとふくらんで、パチンと割れる。ヤツの口のまわりはガムだらけ。うらやましいような気分であつて、母親にしかられてから、チューインガムはなんとなくエン遠い菓子なのである。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）  
（図）「チューインガム」の広告・1915（大正4）年12月・朝日新聞掲載